拠点運営での取組報告

［事業レポート］

やはぎかん　5/12　花のとう支援事業

●総来場者数　523名

●花のとう開催に向け、愛知学泉大学・短期大学、岡崎城西高等学校との連携を引き続き取り持った他、あらたにYAHAGI JAZZ NIGHT実行委員会のような矢作地域で活動をしている団体を紹介し、マッチングに至りました。

●地域交流センターとして、広報活動支援等を行い、運営をサポートすることができました。特に、施設を利用した大規模イベント運営のノウハウを伝えることで、花のとう実行委員会としての経験値がより高いものになりました。

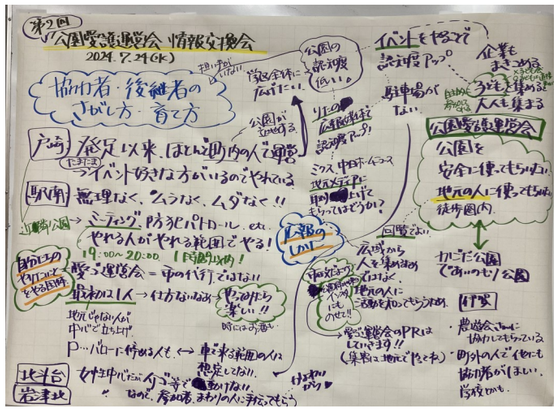
むらさきかん　5/18　むらさき麦まつり連携事業 市民活動博覧会

●総来場者数　1236名

●地域のおまつり「藤川宿むらさき麦まつり」と連携し、むらさきかん館内での市民活動団体等の体験ブースや活動内容の展示、物品販売をしました。市民に対して、市民活動の啓発をし、団体の活性化に寄与できました。

●むらさきかんが藤川宿まち歩きスタンプラリーのチェックポイントになった事で、むらさき麦まつりに来た多くの方が来館し、相乗効果が得られました。

まち育て推進チーム　Pick UP！



本誌123号で特集した、公園愛護運営会の「情報交換会」の第2回目が7月24日に岡崎市役所分館にて開催されました。

事前に他の愛護運営会に聞いてみたい話題をアンケートで把握し、「協力者・後継者の探し方・育て方」、「イベントの企画運営広報」、「公園の管理方法」を主なテーマとして、参加者同士で自団体の取組の具体例を交えて議論を深めました。

公園愛護運営会の活動を通じて、地域の絆が深まったり、多世代の交流が広がったりという効果があることが改めて確認された一方で、公園愛護運営会の認知度が低く、協力者や後継者探しが難しいという課題が浮き彫りになりました。今後、愛護運営会の活動の意義や活動をされている方の思いを周知するなど、共感者を増やす支援に力を入れていきたいと思います。

お問合せ		よりなん	59−3600	むらさきかん	66−3066	市民活動センター	23−3114
なごみん	66−8251	やはぎかん	33−3665	悠紀の里	57−5050	まち育て推進チーム	23−2888

まちのミカタ
Litaracy
2024.9 vol.129

発行・編集
特定非営利活動法人
岡崎まち育てセンター・りた
〒444-0031　愛知県岡崎市梅園町3丁目6-6
TEL(0564)23-2888／FAX(0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com/
https://www.facebook.com/okazaki.lita/

配布
岡崎市図書館交流プラザ・Libra／岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送　等　※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力
岡崎市役所各支所／岡崎市各市民センター／シビックセンター／FMおかざき／杉くんの駄菓子屋／松應寺／cafeくらがり

まちのミカタ
Litaracy　ーりたらしいー
129
2024年9月

2011年時点の松應寺横丁のまちなみ（太子堂前）

2011年時点の松應寺横丁のまちなみ（参道アーケード）

2018年のにぎわい市の様子

現在の参道アーケード

特集　松應寺横丁の軌跡　その１
ー空き家活用編ー

2024年3月から6月にかけて、名古屋鉄道株式会社（以下、名鉄）が手掛ける沿線地域の魅力発信の取組「名鉄Emotion!」にて岡崎市が取り上げられました。そのメインビジュアルのロケ地となったのが松應寺横丁でした。名鉄の主要駅のポスターや電車の中吊り広告、テレビCMなどでご覧になった方も多いのではないでしょうか。

家康公が父君・松平広忠公を祀って建立した松應寺には、修復されたばかりの御廟所、木造のアーケード、本堂脇の珍しく白い花をつけるフジなどの見所のほか、戦後に境内に形成された闇市発祥の商店街の空き家を活用した個性的なお店も多く、これまでにテレビや雑誌をはじめ、たくさんのメディアで取り沙汰され、今や松應寺横丁は「岡崎の顔」の一つと言っても過言ではありません。

しかし、りたが地元の方々と共に活動を始めた2011年当時は、「知る人ぞ知る」存在でした。まちづくり的には「空き家活用」の先進事例として取り上げられることが多いものの、実は高齢者支援、地域包括ケアの分野でも先進的な取組が行われています。この13年間でどのような軌跡をたどってきたのか、2号にまたがり紹介します。

特集 松應寺横丁の軌跡　その１
ー空き家活用編ー

まちづくり協議会設立から「にぎわい市」「なかみせ亭」

はじまりは2011年7月に遡ります。木造アーケードや路地に面した味わい深いまちなみに魅力を感じたりたスタッフからの働きかけにより、松本町町内会役員、松應寺住職、松本町年行司はじめ地域住民有志、そしてりたからなる**「松本町活性会議」**（後に「松應寺横丁まちづくり協議会に改組）が設立されました。同会は、まず町内の課題やニーズを把握するために、全町民を対象としたアンケート調査を実施。その結果を元に、横丁の認知度を高めるための縁日「松應寺横丁にぎわい市（以下、にぎわい市）」の開催や、横丁内の家屋の半数以上を占めていた空き家の活用推進などを盛り込んだ**「松應寺横丁にぎわい基本計画」**を策定しました。

同年11月に開催した第1回**「にぎわい市」**には想定を上回る1,000人以上の来場者があり、半年後の第2回「にぎわい市」にはさらに多くの人出となり、こうしたにぎわいを日常的に定着させるべく、空き家活用への取組に力が注がれることになりました。長年放置された空き家も多く、所有者の把握は難航しましたが、ようやく貸してもらえる空き家が見つかり、2012年9月、空き家活用第1号となる**「松本なかみせ亭」**を開設しました（愛知県「新しい公共支援事業」により改修資金を調達）。

▲第2回松應寺横丁にぎわい市（2012年3月）

▲AT2013クロージングイベント（2013年10月）

追い風となった「あいちトリエンナーレ2013」

これらの活動がきっかけとなり、りたからの働きかけも奏功して松應寺横丁が「**あいちトリエンナーレ2013**（以下、AT2013）」の岡崎会場の一つに選ばれ、さらに3つの空き家が展示会場として活用されることになりました。2か月半の会期中には2.3万人もの人が市内外から訪れ、松應寺横丁の認知度が飛躍的に高まりました。横丁内の空き家を活用したいという人が増え、当初は難色を示していた地権者の空き家活用への抵抗感が払拭され、AT2013以降、約半年に1件のペースで空き家マッチングが進み、現在では横丁内にあった19軒の空き家のうち、15軒が活用されるまでになりました。

▲松應寺横丁の空き家活用

今どき珍しい!?商店街組合の設立

2018年には、横丁内に新たにできた店舗と周辺の既存店舗からなる商店街組合**「松應寺横丁まちづくり発展会」**（会員数28）を設立。年2回のにぎわい市に代わり開催されるようになった毎月第3土曜日の「花まちフェスタ」やパンフレットの作成、鯉のぼりや七夕など季節の装飾などの活動費用はすべて会費から調達されるようになりました。加えて、木造アーケードの修繕や突発的な支出に備えて基金の積立を開始するなど、地域の発展と商店の発展の両立を図るため、毎月の定例会で地域住民と商店主が議論を重ねて今に至ります。

「岡崎の顔」となった松應寺横丁

2020年6月には、松應寺横丁が市政だより「おかざき」の表紙を飾り、2024年3月には「名鉄EMOTION!」のメインビジュアルとなりました。なかみせ亭開設当初は月200人程度だった来街者も、今では月5,000人ほど（いずれも概算値）となり、松應寺横丁は名実ともに「岡崎の顔」となったと言えます。

本号では「空き家活用」や「景観」「観光」というテーマで脚光を浴びる松應寺横丁の軌跡を紹介しましたが、次号ではその陰で花開いた「地域福祉」「地域包括」の取組を紹介します。

▲2020年6月の市政だよりの表紙

▲金山駅に掲出されたポスター

まちの今を切り取る！
まちづくりトピックス
—town planning topics—

防災交流会
～ゲームを通して防災意識を高めよう～

6月29日に西部地域交流センター・やはぎかんで開催された「防災交流会～ゲームを通して防災意識を高めよう～」。地域の役員、小学生親子など年齢も立場も違う49名の参加者、それを支えるボランティアやスタッフを合わせ総勢79名の参加者が集いました。

昨年実施した意識アンケートより、若年層の防災意識が低いことが分かり、自助・共助の重要性について遊びのコンテンツを用いて地域住民に浸透させようと、市民活動団体「岡崎ボードゲーム会」に協力を依頼しました。当日はカードゲームや連想ゲームなどを取り入れ遊びながら防災を学び、更に多世代の参加者をつなげる役割として愛知学泉短期大学生による運営ボランティアが活躍する場となりました。

ゲームの他にも、3種類の体験ブース、そして福祉や子育てに関わる市民活動団体の活動紹介や防災に関する意識調査結果を展示しました。体験ブースには「非常食、食べれる？」「段ボールで寝れる？」「新聞紙で何作る？」を設置し、実際に避難所で起こり得る事態を想定する場を提供しました。参加者同士で「新聞紙スリッパ」をより頑丈にカスタマイズしたり、初対面にもかかわらず備蓄品のアイデアで盛り上がる姿が見受けられ、笑い声や驚きの声など響き、賑やかな場となりました。

地域交流センターには市民活動支援に加え、地域活性化を推進する役割もあります。今回の防災交流会をきっかけに、学区防災訓練の見直しや、自分の住むまちの防災まち歩きの実施、また、子供会の行事に市民活動団体の協力を得たいなど協働を進めたいという意見もあり、多くマッチングの機会が芽生えた交流会となりました。

りた's Eye

ギャラリー展示では災害時に「できること」「気がかりなこと」などを聞き取りしました。「周りの人と違うことを認識し、お互いの少しの気遣い・思いやりが大切。日頃からの顔が見える関係作りも、災害時に大いに役立つことだ！」とスタッフ一同あらためて感じる機会でした。

りた職員の思いを伝える！
コラム ~lita column~

祭りはまちを強くする？

▲子ども会所有の祭りの法被。羽織るだけで気分があがってしまう人も多いのでは？

ICTの導入や活動の簡略化など、町内活動でも働き方改が進んでいる今日この頃。一方で、「顔の見える関係が大事だ！」という声も。何を優先していけばいいのか悩みながら町内活動をしている方も多いのではないかと思います。

今年、子ども会の会長となった私は、地域の夏祭りの実行委員となりました。メンバーは、総代さんを中心とした70代ぐらいの方々ばかり。30代のメンバーは私を含めて3名程度です。夏祭りに向けての準備は、テントの設置、50本ののぼり、会場を照らす提灯飾り20m、その他もろもろ。日差しが照り付ける中の準備はもちろん大変です。でも、だんだんと出来上がる会場に胸が高鳴りましたし、その合間で交わされるたわいもない世間話を、私はとても楽しいと感じました。

祭りが終わった翌日には、準備に参加していたメンバーで感想を語り合いながらテントの片付けやゴミ拾いをしました。一緒にやり遂げたという一体感が、自然と地域のつながりを強めてくれたと感じました。

お祭りは大盛況でした。家族や子どもたちが次々と訪れ、笑顔で交流し、みんなで盆踊りを踊る姿が印象的でした。年に一度、たった2日間の出来事ではありますが、地域の人々の顔を覚え、つながりを深める絶好の機会となった祭り。やはり祭りは、まちを救う鍵なのか。そんな風にも思う今日この頃です。

岩川厚子（やはぎかんセンター長代行）
りたで働き始めて4年目に突入。最近は、二人の小学生の夜ご飯とお稽古の送迎に四苦八苦中。うまくこなせられる日がくるのか?!